

社会科学教育の専門性を育てるために

— 競争によってプレゼン能力と内容理解を高める —

深 草 正 博

【キーワード】 競争・模擬授業・社会科学教育の本質・学生への刺激

はじめに

本稿の成り立ちには、偶然と必然とが介在しているように思えてならない。すなわち、偶然とは、たまたま今年（平成二十年）の秋に、日本社会科学教育学会の求めに応じて、【課題研究発表五】「社会科学教育の視点から見た教師の専門性―若い教師が大学での教員養成をふり返る―」のタイトルの下、私自身が教師を育てるために大学でどのような試みを行っているかを発表する機会が与えられたということである。他方で必然とは、もとより自分がそう思っているだけのことはあるが、ここで紹介・発表した「社会Ⅰ」という演習科目は、昨年度（平成十九年度）における

本学の教育学部創設に伴い、カリキュラムの大幅な変更により今年度限りで無くなるもので、平成三年以来十八年の長きに亘って担当してきたものを、何らかの形で記録にとどめておきたいという強い思いがあった。そう思っていた矢先のことであっただけに、まさしく時の必然という感が私にはあったのである。

さて、本学の教育学科は、いわゆる国立の教育学部とは違って、最初から算数だとか国語だとかの専門性をもって学生が入学してくるのではない。ほぼ一括して、皆が同じ講義・演習を受けることになるのである。したがって、学生自身は将来小学校の教師になるためにはあらゆる科目に精通せねばならないことを承知はしていても、必ずしも社会科にそれほど強い関心をもっている学生が多くないのが現状である。しかもほぼ全員といってよいほど、社会科に対して誤ったイメージすなわち「社会科＝暗記科目」を持っている。こうしたいわば社会科に対する誤解を大学二年段階でどう是正するか。そうして、できればこれまで社会科がそれほど好きではなかった学生に、好きになってもらうためにはどうすればよいのか。ここに私の最大の悩みがあった。もとよりその悩みは未だもって解消されていないが、それなりに成果のあったことも事実である。

これから記す内容は、もちろん一朝一夕になったものではない。開始以来様々な紆余曲折、試行錯誤を経て、何とか一応のまとまりを持ったものになったと思っているものである。その途中経過を十分に記すことはできない。あくまでも現時点、結果からいえば最終の内容であることをおことわりしておきたい。

思い返せば数え切れないほど多くの学生が必修として演習に参加した。それぞれが色々な思いを持って一年間を終えたであろう。そのほんの一端しか彼らの思いを紹介できないことも申し訳なく思う。

一、前 提

一年間の演習を始めるにあたって、以下の七点を学生に求めている。

- (一) 挨拶と服装（発表者はスーツ）、私語・居眠りは退室
- (二) 二～四人で発表・模擬授業
- (三) B4・一枚に「手書き」でまとめる
- (四) 発表時間は二十分（十五分で一鈴、二十分で二鈴）、司会は教員が行うが、時として四年生に任せる場合もある
- (五) 同じ箇所を二つのグループが行う
- (六) 発表後、質疑応答、補足説明
- (七) フロアの学生は必ず該当箇所を読んでくる

二、社会科学に対する基本認識

演習の到達目標を以下の四点にしほっている。

- (一) 社会科学は「暗記科目」ではない
- ① 一つの事象に問題点を見いだす鋭い眼を養う
- ② その問題点を徹底的に追究して、ある解決に至る道筋を明らかにする力を養う（問題解決能力）

- (一) 子どもの持っている固定観念を突き崩し、全く新たな眼で事象を見させる（驚き・感動→追究意欲）
- (二) 将来自分にしかできない独創的な授業を生み出してみたいと意欲を持つ（自己教育力・自己創造力）
- (四) 授業を楽しくするためあらゆるエピソードを集める（雑学）

三、使用テキスト・論文他および発表内容とその順序（平成二十年度）

以下の番号が、学生の発表順序である。

◆有田和正『授業力アップ入門』明治図書、二〇〇五年⁽²⁾

- 一、一章「授業とは『何を』『どうすることか』考えよう」・二章「目標とする授業のイメージをしっかりとて努力しよう」
- 二、三章「教材開発に必要な基礎技術を具体を通して体得しよう」・四章「指導技術の向上に日夜努力しよう」
- 三、五章「楽しい学級づくりの技術を体得しよう」・六章「学習意欲の高め方を常に工夫しよう」・七章「パフォーマンス・トレーニングをしよう」
- 四、八章「子どもを『見る目』を常に見がこう」・九章「常にユーモア精神をもち、明るく子どもと対応しよう」・十章「教師は常に実力・人格・他人との対応を見られていることを考えて行動しよう」
- 五、十一章「十八の学習技能を鍛える授業を常に考えよう」・十二章「『プロ教師』をめざして授業改革に挑戦しよう」

- 六、● 卒論ダイジェスト、薄田太一「社会科学教育における『切実性』の再検討」『皇學館大学教育学会年報』第十五号、一九九四年、● 副論文：谷川彰英「切実な問題とは」『考える子ども』社会科学の初志をつらぬく会、一九八五年、山根栄次「問題解決学習における『問題の性質』」『青年と社会科学教育研究』社会科学の初志をつらぬく会、一九八四年
- 七、● 卒論ダイジェスト：植村恭子「法則化の検討」前掲『年報』第十七号、一九九六年および謝名堂正之「教育技術法則化運動の検証と再考」同『年報』第二十五号、二〇〇四年
- 八、● 谷川彰英『戦後社会科学教育論争に学ぶ』（明治図書、一九八八年）よりVI「神話復活論争」
- ◆ 奥住忠久・山根栄次編『二十一世紀「社会科学」への招待』学術図書出版、二〇〇〇年
- 九、第I編「社会科学教育の本質と史的展開」第一章「社会科学教育の本質」一～三節
- 十、同第二章「社会科学教育の史的展開」一～三節 ● 副論文：谷川、前掲書のII「問題解決学習VS系統学習」
- 十一、同第三章「問われる二十一世紀の社会科学」
- 十二、第II編「社会科学における領域および課題」第一章「地理」
- 十三、同第三章「政治と法」
- 十四、● 安藤 豊『社会科学授業の改革 十五の提案』（明治図書、一九九六年）より、提案③「子どもに提案させる——單元『消防のしごと』の導入授業——」
- 十五、第III編「社会科学教育の創造と展開」第一章「小学校社会科学の創造と展開」一～五節
- 十六、第IV編「社会科学の今日的展望と課題」第一章『総合的な学習の時間』の新設と社会科学教育」一～五節

- 十七、同第二章「男女共同参画社会における社会科教育」一～二節 ●副論文…卒論ダイジェスト、高木由美子
「真の自由と平等の社会を求めて―女性の目を通して―」前掲『年報』第十八号、一九九七年
- 十八、●卒論ダイジェスト、東川智子「原爆をどう教えるか」同『年報』第十九号、一九九八年

◆深草正博『社会科教育の国際化課題』国書刊行会、一九九五年

- 十九、第一章「社会科教育の国際化課題」の二「日本歴史および日本文化の相対化」の（二）「日本歴史の相対化」
- 二十、第二章「社会科教育の国際化に向けて」の二「日本歴史の相対化―『日本史』学習における国際的連関」
- 二十一、●深草正博「江戸と明治―断絶か連続か」『近現代史の授業改革 五』明治図書、一九九六年、のち深草
『環境世界史学序説』（国書刊行会、二〇〇一年）に若干加筆の上収録
- 二十二、●松本 彰「戦後史学と『大塚史学』」『歴史評論』一九九五年、六月号 ●副論文…近藤和彦「大塚久雄」
今谷 明他編『二十世紀の歴史家たち（一）』刀水書房、一九九七年
- 二十三、第四章Ⅰ「異文化理解から見た大塚久雄」
- 二十四、同Ⅱ「大塚久雄の理論的变化について」
- 二十五、第六章「グローバル教育を考える」

補足説明で紹介・使用した文献

- 一～六、『有田和正著作集』全二十三卷（うち別巻三卷）明治図書、一九八九年、『有田式指導案と授業のネタ』全

十一卷（うち別巻三巻）明治図書、一九九二年、有田『子どもの生きる社会科授業の創造』明治図書、一九八二年、同『子ども「見る」目を育てる』国土社、一九八六年、同『名人への道』日本書籍、一九八九年、長岡文雄『授業をみがく』黎明書房、一九九〇年、深草正博『「強育」と「共育」のはざま——『学力低下論争』を類型学的にみる——』前掲『年報』第二十五号、二〇〇四年、また、有田「長岡文雄の主張を授業で検証して」『授業研究』（一九八四年、九月号）と長岡「有田和正氏の論文を読んで」『授業研究』（一九八五年、一月号）の二論文から「長岡・有田論争から教育の本質をさぐる」というプリントを作成し配布、薄田・修士論文（三重大学大学院教育学研究科提出）「長岡文雄の社会科授業の再検討——有田和正実践との比較を通して——」、問題解決学習か系統学習かに関する学生による五分間論争のプリント

七、
『教え方のプロ・向山洋一全集』全六十巻、明治図書、一九九〇～二〇〇三年、向山『子供を動かす法則と応用』明治図書、一九八四年、同『授業の腕を上げる法則』明治図書、一九八五年、同『教師修業十年』明治図書、一九八六年、同『ドキュメント「教育技術法則化運動」の誕生』明治図書、一九八九年、西郷竹彦『法則化批判』黎明書房、一九八九年、教育実践研究会編（代表 小川博久）『子ども不在』の教育論批判』大和書房、一九九〇年、「有田・向山」社会科立ち会い授業』『授業研究』（一九八五年八月、臨時増刊）

八、
高橋早苗・山口康助編『神話・伝承をどう教えるか』明治図書、一九六八年、坂本太郎『日本歴史の特性』講談社学術文庫、一九八六年、戸田善治「歴史学習において神話・伝承はどのように扱えばよいか」星村平和編『教育課程の論争点』教育開発研究所、一九九四年

- 九、十一、上田薫（編集代表）『社会科教育史資料』全四巻、東京法令出版、一九七四年、佐藤照雄他（監修者）
『小学校社会科教育実践講座』全十九巻、教育出版センター、一九九〇年、朝倉隆太郎（編集代表）『現代社会科教育実践講座』全二十一巻、研秀出版、一九九一年、『上田薫著作集』全十五巻、黎明書房、一九九二年、船山謙次『社会科論史』東洋館、一九六三年、森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、一九七八年、平田嘉三・初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』教育出版センター、一九八六年、片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、一九九三年
- 十二、和辻哲郎『風土』岩波書店、一九六三年、A・ベルク『風土論序説』筑摩書房、二〇〇二年、井上英二『五万分の一地図』中公新書、一九六六年、西尾文昭「図（地図）や絵で授業は盛り上がる」『社会科教育別冊』No. 一四、一九八七年、前田康裕「略地図の書き方技術」『社会科教育』No. 四四七、一九九七年、武山達弥「地図帳でする競争場面づくりの面白例」同No. 五五八、二〇〇五年、三省堂編修所編『各国別地理の整理』三省堂、一九八四年、織田武雄『地図の歴史―世界編―』講談社現代新書、一九七四年、その他、世界を様々な角度から見た地図配布
- 一三、佐伯啓思『市民』とは誰か』PHP新書、一九九七年、深草「佐伯啓思が主張するシチズンシップ教育」『社会科教育』No. 五四七、二〇〇五年、M・フィンレイ『民主主義―古代と現代』刀水書房、一九九一年、G・ウिल्ズ『リンカーンの三分間』共同通信社、一九九五年、日本社会科教育学会編『公民的資質の形成』東洋館、一九八四年
- 一四、教育実習生が平成九年度に特別研究授業で行った「第四学年 火事を防ぐ」の指導案を配布
- 一五、上記九から十一と重なる

十六、 奥住忠久・深草正博『二十一世紀地球市民の育成』黎明書房、二〇〇一年

十七、 R・アイスラー『聖杯と剣』法政大学出版、一九九一年、水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波新書、

一九七三年、井上輝子『新版』女性学への招待』ゆうひかく選書、一九九七年、大越愛子『フェミニ

ズム入門』ちくま新書、一九九六年、A・ミシエル『フェミニズムの世界史』文庫クセジュ、一九九三

年、青木やよい『増補新版』フェミニズムとエコロジー』新評論、一九九四年、K・チェリー『日本

語は女をどう表現してきたか』ベネッセ、一九九〇年、O・ブラン『女の人権宣言』岩波書店、一九九五

年、I・イリイチ『ジェンダー』岩波現代選書、一九八四年、原ひろ子『女性と社会』（NHK市民大

学）、一九八八年、山下悦子『女を幸せにしない』『男女共同参画社会』洋泉社、二〇〇六年

十八、 M・ハーウィット『拒絶された原爆展』みず書房、一九九七年、NHK取材班『アメリカの中の原爆

論争』ダイヤモンド社、一九九六年、直野章子『原爆の絵』と出会う』岩波ブックレット、二〇〇四

年、広島市平和記念資料館編『原爆の絵』岩波書店、二〇〇七年、山崎泰正『京都に原爆が投下されな

かった本当のワケ』京都教育大学系教育研究会編『京都のなぜなに学習クイズ九六問九六答』明治

図書、二〇〇一年、河原和之『近現代史と原爆投下』をどう扱うか』原田智仁編『国民的アイデンティ

ティ』をめぐる論点・争点と授業づくり』明治図書、二〇〇六年

十九、二十、『海外交渉史の視点』全三巻、日本書籍、一九七五～一九七六年、土田直鎮他監修『海外視点』◎日

本の歴史』全十五巻、ぎょうせい、一九八六～一九八七年、田中健夫『世界歴史と国際交流』●東アジ

アと日本』放送大学教育振興会、一九八九年、河合敦監修『世界史は日本史をどう記してきたか』

青春出版社、二〇〇五年、星村平和・原田智仁編『歴史授業のワールド化』◎日本史と世界史のドッキ

ング学習』明治図書、一九九六年、深草「我が国の歴史を世界の歴史を背景にして学ぶカリキュラム構成」『CD-ROM版 中学校社会科教育実践講座 理論編 三』ニチブン、二〇〇二年

一一一、

E・O・ライシャワー『日本近代の新しい見方』講談社現代新書、一九六三年、大谷瑞郎『幕藩体制と明治維新』亜紀書房、一九七三年、速水融『江戸の農民生活史』NHKブックス、一九八八年、川勝平太『日本文明と近代西欧』NHKブックス、一九九一年、スーザン・B・ハンレー『江戸時代の遺産』中央公論社、一九九〇年、佐藤常雄・大石慎三郎『貧農史観を見直す』講談社現代新書、一九九五年、田中圭一『百姓の江戸時代』ちくま新書、二〇〇〇年、鬼頭宏『環境先進国 江戸』PHP新書、二〇〇二年、司馬遼太郎『アメリカ素描』新潮文庫、一九八九年、関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館、一九五八年、板倉聖宣『歴史の見方考え方』仮説社、一九八六年

一一二、

『大塚久雄著作集』全十三巻、岩波書店、一九六九～一九八六年、大塚久雄他編『西洋経済史講座』全五巻、岩波書店、一九六〇～一九六二年、大塚『社会科学と信仰と』みすず書房、一九九四年、豊田四郎他『大塚史学批判』大學新聞連盟出版部、一九四八年、住谷一彦他編『歴史への視線 大塚史学とその時代』日本経済評論社、一九九八年、中野敏男『大塚久雄と丸山眞男』青土社、二〇〇一年、楠井敏朗『大塚久雄論』日本経済評論社、二〇〇八、『みすず』（四二六、一九九六年）に掲載された関口尚志「大塚久雄先生への弔辞」などプリントにして配布

一一五、

免住忠久『グローバル教育の理論と展開』黎明書房、一九八七年、同『グローバル教育』黎明書房、一九九五年、『免住忠久教授著作選集 グローバル社会と教育』中部日本教育文化会、二〇〇五年、日本グローバル教育学会編『グローバル教育の理論と実践』教育開発研究所、二〇〇七年

四、発表の配列の基本理念

以上の発表の配列の基本理念は、次の四点である。

- (一) 全体を二十五回に分けて発表させ、また一つのグループが内容を変えて二回発表できるようにしてある
- (二) 比較的読みやすく分かりやすいものから出発し、最終的には学術レベルまで到達する
- (三) 論争点のいくつかを取り上げ、社会科学教育の本質（ひいては教育さらには学問の本質）をつかませる
- (四) 優秀卒業論文のダイジェストを読ませることによって、二年後にはこれだけのものが書けることを実感させ、学生に刺激を与える

五、考 察

それでは、これまでの経験をふまえて、この演習についていくつかの考察を試みてみたい。

まず、一の（五）に関して、同じ箇所を二つのグループに発表させることで、それぞれが比較されるためそこに競争意識が働き、互いに負けまいとして、グループが結束し頑張る姿が見られる。もちろんその際教員が競争心をあおる働きかけをしている。時として嫌われることを覚悟して。

また、発表箇所の内容をしつかり把握していないと、フロアや教員からの質問に答えることができなくて、立ち往生する場合があり（時として泣く場合もある）、学生たちの前で恥をかくこともしばしばである。したがって、回を追ううちに空いている教室（一号館の112や113教室）で友人たちに見てもらおう形で、予め発表を練習している姿が見ら

れるようになる。しかもストップウオッチで二十分きっかりに終わるように練習しているグループもある。こうして、グループで何度も集まって発表内容を徹底的にチェックし、参考文献なども読み（教員に質問に来ることも多いが、そこでもすべては答えず、課題を出すことも多い）、内容理解が高まるとともに、友人を前にしての練習で、プレゼン能力も高まっていく。その際、発表者は用意してきた原稿を読むだけの場合も多々あるので、なるべく原稿から目を離して、フロアの学生の顔をしつかり見て説明するように、喚起を促している。発表が終わったときの学生たちのすがすがしい顔を見るときが、私の一番の喜びである。また説明の便宜のために黒板に貼ったもので優れたものは私どもらって保管することになっている（年に一、二例あるかどうかであるが）。

さらに（三）のB4・一枚に「手書き」については、限られた枚数でいかに自分たちが主張したいことをまとめるか、というよい訓練になると考え、そのうえパソコンが得意な学生たちにあえて手書きでやらせることには、次のような理由がある。教室で子どもたちに授業を行う場合には、やはりチョークで黒板に書くことが基本であり、そのためには筆順正しく、誤字や癖のある字を書かないことが大切である。これは教育実習からもどってきた学生たちが、よく口にすることでもある。発表後、最初に司会者がフロアの学生に指摘させることはこれ（誤字、筆順のあやまりなど）であり、学生たちからも評判がよい。

最後に（七）について、演習を始めるにあたって、一番強調調することがこれである。自分が成長するためには、最低限これだけは実行することを口酸っぱく言うことにしている。そして必ず一つは質問するつもりで読んでくれることを勧める。これによって発表を聞けば、自分の理解の不十分な点や至らぬ点が浮き彫りになり、また他の学生の質問や教員の説明も大きな刺激となり、読んでこなかった学生と比べれば格段の差になる。残念ながら一部の学生はこれを実行せずに参加しているが、かなり多くの学生はしっかりと読んでくる。一年たつと見違えるように成長する者も出てくる。

六、学生・卒業生の意見・感想

以下に掲げるものは、これまで「社会Ⅰ」を受講した学生・卒業生から集ったアンケートである。実際には膨大な量があるが、すべてを掲載する余裕はなく、残念ながらそのほんの一部である。現二年生、三年生、四年生、卒業生で司会経験者、現職の教員の順で示したい。ここから彼らが「社会Ⅰ」から学び取った一端（とくに上記二に示した社会科に対する認識の面から）、を読みとって頂ければ幸いである。

(一) 二年生（実際には本稿発表の時点では半年しか受講していない）

● 今までは「社会は暗記教科である」と考えてきたし、勉強もそのようにしてきた。でも、「社会Ⅰ」の授業でみんなの発表を聞いたり、自分で調べたことを発表していく中で、それは間違いだということが分かった。また、社会にはいろいろな問題点があり、たくさんの人々の議論がなされているんだと思った。先輩達の五分間のディベートのプリントが印象に残った。学生でも、あんなに濃い内容のディベートができるんだなと思った。

● 初めのうちは、先生のマジックのような言葉に、乗せられるようにして、教科書を読んで予習をしていました。私は、有田先生のネタの話など、何も、知らないまま、先生になりたいとだけ、思っていた学生でしたが、今までは、授業とは、どういうものなのか、今までの固定概念を崩しながら、少しずつですが、考えています。社会科には、深い歴史があり、自分たちが、子どもに教えるのは、どんな方法が一番ベストなのかを、日々の授業で考えさせられ、私が教員になる上で、とても役立っています。発表というスタイルも、自分たちが努力し、やってきたことを、それぞれのグループが、必死になって、とりくむ姿勢が、とても新鮮です。このような授業スタ

イルは、他の教科でも、とりいれることが、大事でないかと感じました。

● 二年生になってこの講義を受けるまで、皆の前に立ち発表する機会がなかったので、このような機会は貴重だと思います。発表に向けて相方と一緒に何日も集まって資料を探したり、意見をぶつけたりすることが本当に自分自身の勉強になりました。発表することで人前で話すことにも慣れて、発表が終われば先生や皆からの意見や評価を聞かしてもらい、それによってまた伸びます。人の発表を見ても「なるほど」と思うことが何度もあって学ぶことの多い講義です。

● 今まで社会科は暗記さえすればよいと思っていただけ、「社会Ⅰ」を受講して、問題解決のために考えることが本来の社会科だと知って驚きました。社会科は地理・歴史が主だと考えてきたけど、社会科の本質は公民にあるということも初めて気づきました。自分の発表の時は教科書以外にも、調べ物をして、今まで知らなかったことをたくさん知り、もし発表がなかったら、こんなに自分から「調べる」ということをしなかったかもしれないと思いました。

● 春学期間この講義を受講して、様々なことを体験した。まずは発表（模擬授業）、準備段階で自分の相方と協力して本を読み進め、意見をかわすことで、理解を深めることに繋がった。次に誤字脱字の指摘、他の人から自分の間違った字や、癖のある字を指摘してもらい、また自分も他の人のそれを指摘するというやり取りの中で、「見つける」能力が養われた。総合的にこの講義の時間はとても充実していると感じた。

● 半年間「社会Ⅰ」を受講して、社会科のイメージががらりと変わりました。暗記科目だと思っていた社会科に、あのような思い、願いがあったこと、社会科に対しての論争が多くあることを知り、驚きと感動を覚えました。また、この社会科を受けた後先生がおっしゃる問いが気になって、何だろう、どうしてだろうと考える事が多く

なりました。そのためか、配布されたプリントや本も少しずつですが読むようになりました。自分の中で何か変化が起こってきたのではないかと感じています。発表を自分で行うことで、自分がまだまだ未熟なことがよくわかりました。

● 今まで社会は暗記教科だと思込んでいました。しかし大学に来て初めて社会は暗記教科ではないことを知り、二年生になって「社会Ⅰ」を受講し、自分の力で学習、理解し、発表することで、そのことを身をもって感じました。このような気づきを含めて私は「社会」から、何ごとも身をもって体験し、考えて、はじめて理解し、知識になるということを改めて・・・というより始めて知ることが出来ました。また今までの講義ではみんなの前に出て発表するということはあまりなかったもので、とても良い刺激になりました。

● 社会という科目の見方が変わった。小学生の頃から社会は苦手であっただけ、指導の仕方を学び、自ら、さらに学び社会というものがやっと分かった気がする。まだまだ知らないことが多く、これからどんどん新しい知識が増えると思うと、ワクワクする。半年間社会Ⅰを受講して私の中で社会は苦手のかたまりでなくなってきた。

● この講義を受けて、今までの社会科の考え方が変わり、自分の視野が広がっているように感じています。また発表という大勢の人の前での話し方、態度や教材の内容などをしっかり考えなければならず、プレゼンテーション技術や、今後教師になる上で、身につけなければならない技術や態度を身につけられるような講義であると思えます。

● 社会科という授業が、今まで学んできた暗記科目でなく、自ら考え、発展させることが大切である教科ということを学んだ。これは、他の教科にはなく、この教科での楽しさや面白さがわかった。本を読み、発表という形でみんなに意見を伝える授業。我々が主役となれる授業であり、他の仲間の考えとを比べたり、新しい考えを知

ることもできた。他の講義では学ぶことができないことを学べる講義（授業）だった。

- 三点にまとめられる。①自分達で調べ発表することで、実践力が付く。また他の発表と比べることで足りない点を補える。②他人が調べ、自分が読んできた部分を発表されることで、深く理解でき、疑問が明確になりやすい。③今現在の「社会」という教科の問題点を、教育の技術も含み学び考えられる。以上三点が感想です。特に③は「社会」という教科が教育問題の全てをカバーしている。全てをあつかっていることが、今勉強している自分には大きく影響していて、考えさせられる。

- 私はこの「社会Ⅰ」を受けるまで社会科は歴史について暗記したり、地図記号を覚えることを主とした教科だと思っていた。しかし、実際は、公民的資質を養うことこそ真の社会科であり、問題解決をすることこそ社会科の授業であることを知った。このことを知らずに教師になってしまふ人や、このことを知らずに教壇に立っている教師もいるであろうか。私がこの「社会Ⅰ」を受けられたことは非常に幸せなことであると思う。

- これまで社会科という科目が僕は、苦手で、なぜか考えた時にやはり、高校までの定期テストなどは、暗記するだけで、何をしたかまでは、覚えなくて、だから、忘れたら、終わりとなる。テストのための暗記となっていた。しかし、大学に入り、社会Ⅰの講義を受講して、感じたことは、社会科は、地理や歴史などを暗記するのではないと教えられ、社会科というのは、主体的に追究をしていくものだと言った。また、本当の社会科というのは、公民にあるのだということも知れて、社会科に対する考えが、すごく変わった気がする。

- 今まで読むことも習慣化できなかったが、読む習慣ができてきつつある。社会科は、知識をつめこむものだという認識が打ちくだかれ、考える教科として社会科を学び、教えることを学ぼうと思うようになっていく。まだ発表を一度もしていないため、少し受け身がちになって講義を受けていることを反省し、夏休み明けの発表に備えて

いこうと計画中である。友人の発表をきくことが、教授の講義をきくに劣らないくらい自分の勉強にもつながるんだと感じており、自分にも自己教育力が身に付き始めているように思えるようになってきた。

● この十五回の授業で自分の発表が全て終わりました。一回目の有田本は一回読んでだいたいは理解することができたが、二回目の免住本は、一回読んでも全く理解できず、みんなでも話し合った時も、まとめるのに大変でした。一回目の発表は、自分たちで時間をかけた時二十分でできたが、二回目は二十六分もかかってしまい、みんなでも「三十分あったらな」って言ってました。この二十六分を二十分にするのはとても大変でした。今回の二回の発表では、人の前に立って話すことが、どれだけ難しいかわかり、いい経験になりました。そして、みんなの発表を見て、たくさん勉強になることがありました。

● 自分たちで社会学を学習し、調べ、それを発表する。自ら調べることでより理解も深まりました。そして発表することで皆の前に立つ、皆にわかってもらおうとするための話し方、工夫も勉強になりました。

● 他の学生の発表の良いところを自分たちの発表に取り入れようとして真剣に聞くので、勉強になります。それに毎回の発表のところの本を読んで行くので、本を読むという習慣ができました。自分たちの発表のときも、グループで話し合っているときに、自分の意見を出し合って話し合う力がつきました。

● 社会という授業の見方が変わりました。また本を読むことの大切さを学び、グループで一つの事をやりとげる責任感や達成感を覚えました。最初の有田本では授業に大切なことを学びとても勉強になりました。免住本は難しかった。社会学の本質をこれから学んでいきたいと思いました。

● 講義前に、必ず本を読むことから、本を読むということに、習慣づきました。また、社会とは、暗記型学習であると今まで考えていましたが、追究することができる科目であると分かりました。だから、私たちが今の社会

科のように、追究する授業を子どものころからしていれば、もつと興味をもてたと思いました。

● 講義ではなく演習ということで同じ学生が授業をしている。そういった点で教える側も良い意味で他の学生と同じ目線で授業を行うことが出来ている。たとえば、「どこがわからないのか」「この意味は何だ」といった始めの部分。時々先生達は、「これくらい知っているだろう」といったように授業を進める事がある。同じ学生が行うことで分からない点や知らない点が同じなのでそのような事がないのでとてもいい。いつも深草先生の意見はとても参考になります。しかし、社会Ⅰという授業はそれだけでなく、皆の意見も聞ける。これは、同じ夢を指している者としてとても参考になります。またその意見からの深草先生の発問や時々来て下さる教師の大先輩としての適切な助言などいつもとても勉強になります。

● 社会Ⅰを通して同年代と真剣に議論し考えたことがとても良く、勉強になった。一つの事に対して二グループが発表するという点が比較できてとても良い。

● 社会Ⅰを受けて、同世代の学生が、素晴らしいプレゼンをしていて、純粹にすごいと思った。まだ自分のプレゼンはしていないが、これらのプレゼンから刺激を受けたので負けられないような、プレゼンに出来るように頑張りたいと思う。

● 社会科とはどのようなものかを勉強することができて、私の中の社会科に対しての考え方が変わりました。また、発表を通して有田先生、兎住先生、山根先生が社会科とはどのようなものと考えていたのかを勉強することができたので先生方の考え方を参考にして、私なりの教育を見つけないかと思いました。

● 暗記だけではない社会科を学んだのは初めてです。今まで、地理、歴史特に歴史の暗記というイメージが強くありましたが、それがこの社会Ⅰを受講して、くつがえされました。また、現代の社会がかかえる問題と向き合

うと同時に、子ども達にどのように社会科を教えるべきかを学ぶ事ができるので、教師になった時に本当に自分のためになる講義だと思えます。

● 最初は全員の前で発表ときいてはずかしいと思ったが、いざ自分が発表してみると、教育実習に行ったときの予行演習になり、みんなが一生懸命聞いてくれて嬉しかった。準備をはじめたばかりの頃は、どうしたらいいのかわからず、手探りの状態で、とても大変だったが、何度も図書館などに行き調べていくうちに色々な資料や話題がつながっていき、楽しくなるとともに、ふれる本の量が増えた。私たち自身が追究の楽しさを感じることができた。班の人と協力して考えることで、より仲良くなれたし、みんなで頑張る大切さが分かった。グループでの発表は、一人の発表と又違う良いところがあったし、他の班がどんな発表をしているか、ということでも刺激も受けた。本当に受けて良い授業だったと思います。ありがとうございます。

● 今までの暗記や先生の説明を聞き、ノートをかく授業とはちがって、同じ学科で学びあっている仲間が授業をすることは、新鮮だし、みんなで指摘しあったり、適度のプレッシャーもあり、やりがいがあった。先生から最後にされる補足も、驚いたり、考えさせられることもおおい。

● 文章を読む際、単語の意味が分からなかったり、読み方を知らない時は調べるようになりました。単語や言葉のまとまりの一つ一つを取り上げても、その言葉には歴史があり、人々がどのような気持ちで用いたのか知らなくて、物事の実態は見えて来ないのだと分かりました。問題解決のためには、まず実態を正しく捉えなければならぬと、改めて感じられる授業だと思いました。

● 有田本がとても楽しかったです。授業にはこんなに技術があつて、楽しく出来るとは思いませんでした。今回授業で使った本以外にも購入したので、夏休みにじっくり読みこみたいと思います。授業づくりの本に強く興味

を持てました。発表では、いろいろな参考文献を読みながら準備を進めていく中で、たくさんの知識を得ることができました。そして、授業することの難しさを知ることができました。他の子たちの考えを知ることでもでき、さらに自分の考えが深まっていると思います。そして、板書の仕方なども気をつけながらできるので、来年の教育実習への大きな力となっていると思います。社会科は暗記科目という印象があったけど、教師のやり方一つでおもしろいもので子どもたちを受動的な態度から能動的な態度に変えられて、楽しめることを知りました。授業に対する考えが一八〇度変わったと思います。

● 「社会科は暗記科目」そう認識していた自分にとって、この演習は目が醒める思いでした。さらに、それぞれの先生の考え方、教育観が対立したりして、全然一つにまとまっていなかったのも知りませんでした。極めて、教養が高まっていく演習で、さらに授業を創るということが、どれほど手の込んだことであるかが、認識できてよかったですと思います。

● プレゼンの能力がついたと思う。多種多様なプレゼンと本を読む大切さの二つ。そして読み込んで行くことが力になると思った。緊張感を持って雰囲気慣れるのも一回でもやっておいたら身に付くし、役に立つだろう。去年の自分よりも、具体的にどのように教育していくか考えるいいきっかけになった。また発表に向けて調べたり、意見をまとめる事やプレゼンテーション能力が上手くなった気がする。発表を聴く時も、第一回目の模擬授業とは明らかに違う視点と姿勢で捉えられるようになった。

● グループで発表するのはとても大変でした。どうまとめていけばいいのか、どのように言ったら理解してもらえるかなど考えることが多くて、悩みました。でも、だからこそ、自分なりにより理解できたのではないかと思えました。また、他のグループの発表を見ることにより、私が考えていたことより、もっと深いところまで学ぶ

ことができました。この経験は、来年の教育実習や、将来にとって、良い経験となるだろうと思っています。

● まず、実際に模擬授業の発表をすることで、授業の大変さを実感しました。どのように説明すると生徒にうまく伝わるか、教具はどのようなものを使用すると良いか、たくさん頭を悩まされました。他のグループの発表を見ることで、自分では思い付かなかったやり方を知ることができ、とても勉強になります。発表で取り扱う教材内容は、今後の教育のあり方を考える上で非常に重要なことばかりで、実際に教師になった時に必ず役に立つと思います。発表終了後の先生・同級生からの指摘・助言などからはすくく刺激を受けます。先生の補足説明は、より発表内容を理解しやすく、興味深いです。色々な先生の論文を教材にすることで、教育に対する様々な考えの中から自分の考えを探し出していくことも楽しいです。毎回社会Ⅰの講義が終了する度に、自分が成長していることを感じます。

● この半年間、社会Ⅰを受けて、社会は暗記科目であるという私の固定概念は全て崩された。一つの事象からこんなにも深く考えることができることを知ってすくく驚いたし、自分が先生になったときに、どうすればこの考え深める社会Ⅰの授業ができるかもまだ少しだけ分かるようになった。あと、自分たちで発表の準備をすることで、自分が先生になるまでに良い経験ができるのも良かったとおもいました。

● 教育に関する様々な人の論を様々な方向からみられるのと同時に、そこに発表者の考えも入った発表がきけてとても勉強になりました。そこから、自分が今まで気づかなかった考えや立場・ものの見方を発見するができ、毎回の授業がとても新鮮でした。また、自分たちが発表者になることで、ある人の考え方や立場を人にどう伝えるかを話し合い、そこでぶつかり合ったりしながら班のなかで高め合うことができ、人に伝えることのむずかしさ、班内で出た様々な意見ややり方を一つにまとめていくことの難しさを学ぶことができました。

● 有田・長岡論争で、それぞれの先生の考え方の違いを学んだことで、自分はどちらの立場がいいのかを考える機会となりよかったです。班で発表を合わせた、わかりやすい発表をするにはどのような工夫をすればよいかや、わかりにくい発表のどの点を改善すれば良い発表ができるのかを、学生がお互いに学び合うことができた点がよかったです。

● 社会科という授業の見方が変わった。歴史、地理をこれまで多くの時間を使い学習してきたので社会といえは歴史、地理だと勝手ながらに考えていた。だが、先生の話、授業で使った本を読むとそれ以上に習わなければならぬものが見え、興味深かった。

● 先生がする講義だけでなく、同じ学年の人たちがする発表でもこんな面白い発表ができるのかと思ったのと、同じ課題でも二つの班ですごく違いがでたりして、どの目線からその課題について進めていくかが重要なことに気づけた。社会科に対しての暗記学習という考えがなくなった。

(二) 三年生

● 社会Iで学んだことを一言で言うならば、教師になってからの技術や、教師をしていく上で、自分が考えなくてはならない問題、そしてそこから自分の考えを持つことであった。有田和正先生の授業力アップに關しての講義から始まり、ネタをたくさん作ってそれを子どもに切実な問題として考えさせることが大切であると学んだ。と、思ったら、それを批判する長岡先生のことを学ぶことになり……というように、社会Iでは驚かされるが多かったと思う。とにかく社会Iは自分にとって驚きの連続で、楽しく受講できた。

そして何よりも社会Iを受講して良かったと思うことがある。それは社会Iを受講することによって、自分が

大学生になれたことだ。その他の講義とは違い、自ら調べごとをして自ら受講生のみんなに授業をするという形式だったためであるが、「自ら考える」ということが他の講義とは比べものにならないくらい多かった。考えることが多くなると本を読まずにはいられなくなった。深草先生は一年生の時から一週間に一冊本を読まなくては大学生とはいえないと言ったことをおっしゃった。それで読まずにはいられなくなったのだ。やっと大学生になった気がした。

さらに難しくもあり貴重な体験である、みんなの前に立ち授業をするという経験をする事ができた。教師になるためには人前で話す事になれていなくてはならない。それを体験する事ができたのは本当に自分のためになったと思う。自分が授業をさせて頂いたのは二回でしたが、一回目より二回目の方が手際よくできたし、何よりも気持ちの上でも楽であった。その甲斐あって、教育実習でもうまくできたと思う。

また、教育実習に行つて思ったことがあった。それは有田先生のことを現場の先生と話す事ができたということで、他の先生とのつながりが、社会Ⅰの授業を通してできたのだ。学んだことを通して人とつながることができたのは本当にうれしかった。また学んだことをもう一度見直そうと思う。

● 社会Ⅰでの模擬授業は私にとって初めての模擬授業でした。だから発表の準備をするにしてもまず何をすればよいのか、どう進めていけばよいのかがわからず、同じ班の人と悩んでいました。また進まなかった理由は進め方が分からなかっただけではありません。本の内容がとても難しかったからです。この社会Ⅰで発表を行うまで、そういった本を読んだことはありませんでした。と言うよりはむしろ避けてきました。「読んだってどうせ分からない。」「面白くなさそう。」などの理由からです。実際、発表部分を読んでも何を言っているのかさっぱりでした。しかし何度も読み返していくうちに、ほんの少しですが、何かつながるところがありました。それがだん

だと広がっていくと、内容がある程度分かった気がしました。その分かった内容があっているのかどうか分かりません。しかし自分の中で内容が整理できたなら、それがその人なりの解釈だから良いのだと思います。間違っているところがあれば意見を言ってもらい、訂正していけばよいのです。それが模擬授業の醍醐味だと私は思います。その醍醐味を最も味わえるのが社会Ⅰです。他の教科でも模擬授業はありますが、社会Ⅰほど意見が出ることは少ないです。意見が少なければ内容を批評する人も少なくなります。傷付くことも少ないですが、そのかわり以前と何も変わりません。一方、社会Ⅰでは正直ショックを受けたり、傷付いたりすることもあります。しかし、その反省を生かして、二回目に気をつけようとしたり、他の発表者からの技術を盗んだり、など、自分をレベルアップさせることができます。

● こんな社会Ⅰを受講できて良かったし、これからの人にもぜひ受けてもらいたい演習です。

● 社会Ⅰの講義は私に、教育課程というカリキュラム内での学習をはるかに超えた内容を与えてくれた。有田和正先生という授業のプロについて学び、「有田先生はすごい」と思ったころ、突然有田先生を批判する長岡先生の理論を紹介され驚かされる。このようにこの講義は常に驚きがあり、他の講義とは違う、自分の中に「何が起ころかわからないドキドキ」のような新鮮な気持ちがあった。講義形式も、学生が内容をプレゼンテーションし、それに先生がアドバイスや説明を加えるといったもので、学生が自ら主体的に受けることができ、常に講義内容と真剣に向き合うことができた。プレゼンテーションも学生それぞれの個性が濃く現れて、ペーパーサートを使って行うときや、劇のように内容紹介したグループもあった。私たちは社会Ⅰの授業を工夫するという、教師にとつて最も大切なものの一つを練習していたともいえる。社会Ⅰを経験していたおかげで教育実習での教材研究にも戸惑うことなく行うことができたし、誤字脱字や書き順には特に気をつけるという習慣がついた。先生は常に現

場の目線で話をして下さるので、私も自然にそれらに気をつけることができるようになった。

そしてもう一つの講義を受けて、自分の教育哲学を模索する第一歩を踏み出したことがとても有意義なことだった。この講義を受けて、私は経験学習も系統学習も一辺倒になつてはいけないことを感じた。また経験学習でも先に触れたように有田・長岡論争のように決して一つの考え方だけではないことを知った。さらに、法則化(TOSS) 教授の是非について自分なりに考えたり、「伝統と文化の継承」が叫ばれている中で、神話教育をどのように扱うかということも考えた。これらのことは決して正解があるわけではなく、答えが用意されているわけでもない。ただ過去に教育について真剣に考えた先人たちについて知り、それらについて自分がどう考えるかということで、自分の生き方をより深めていくことができたと思ふ。

● 私は三人での発表だった。それぞれが必ず参考文献や関連のある事柄を調べてこなければならぬ範囲と課題が課せられたため、誰かにまかせきりで発表に臨むことは許されず、グループ全員がどこかの範囲で責任を持たなければならなかったことにこの講義の意義を感じた。またフロアの学生とのやりとりで、何かまわりが気づいていないことを言つてやろうという気持ちが働き、結果として切磋琢磨してお互いを高め合うことができた。

(三) 四年生

- 初めての発表形式の授業で、最初は戸惑いましたが、自ら調べるといふ大学生らしい勉強の方法を身につけることができました。また、毎回の予習として、プリント・教科書を読むことにより、本の読み方を学びました。そして何よりも、深草先生の補足説明が楽しく、社会Iを受講したことで、先生のゼミに入ろうと思いました。
- 私はこの社会Iの授業ではじめて「発表」というものをしました。発表ではまず自分の担当する部分をしっかりと

りと読んで理解しなくてはいけません。それからどうしたら聞いている人がわかるように説明できるかを考えます。自分だけが理解するだけならまだいいけれど、それを他の人にもわかるように伝えることがとても難しくかつたです。でも、この社会Ⅰでの発表を経験することで、人前に立つことの抵抗が減り、人に伝える・教えることの難しさや、ちゃんと伝えることができて仲間と理解を共有することの喜びを知ることができました。

また、社会Ⅰで読んだ本は自分では「難しそう」と思ってたはずではない本ばかりでした。だから初めのうちは自分に理解できるかなと、とても不安でした。でも読んでみると思っていたより読みやすく、また難しい所にあたって、「仲間と一緒にしている」ということが励みになり、何とか理解してやろうという気持ちになれました。分らないところ、難しいところが出てきたら、自分の発表担当の所でなくても、他の本やインターネット等で積極的に調べるようになりました。そうした読み方をしていくうちに、それまでは本に書いてあることを「うん、うん」と読んでいただけだったけれど、「本当にそういえるのかな」と書いてあることに疑問を持ったり、「私はこう思う」と自分の考えを持つことができるようになりました。だから私は社会Ⅰの授業を受けて、発表の仕方、本の読み方を学び、自分の考えを深めることができました。ここで学んだことは、その後の他の授業や自分の勉強、卒論で使う本を読む際にも、とても役立っています。

● 社会Ⅰでは、人前で発表するということで、とても緊張しました。二回の発表を行い、そして他の学生の発表も聞き、発表をどのように行えば相手に伝わりやすく見やすいのか等の発表の仕方を学ぶことができました。そして、数十人の前で発表することは、私自身の一つの試練でもあり、良い経験になり成長の場でした。読んだ本の中に有田氏の本がありました。私の中で有田氏のネタ論はとても印象深く、教員の魅力や力を感じるものでした。その他の本でも当たり前だけど知らぬ知識ばかりで、今まで思っていたものと全く違う見解を知ったりし、

“驚き”を感じられる、それが楽しかった。知識を知ることの楽しさや本を読むときの面白さを感じることができた授業で、毎回楽しみにしていた記憶があります。

● 自分たちで本を読み、話し合い、理解を深めた上でその意見や考えを発表するという授業を通して、自分が少いですが成長したように思います。授業を受講する前までは本に書いてあることは正しいと思ひ込んでいるところがあつたのですが、自分たちで与えられたテーマについて調べ考え、新たな考えが浮かんできたときは本当に嬉しかつたです。一文一文を大切にし、そこからまた自分の考えを持ち、それを発表することの楽しさを実感できる授業でした。

● 社会Ⅰでは、自分で気になったことを調べ発表するので、勉強していても面白いです。また様々な角度から一つのものを見るので、「えっ」とおどろくことが多く、考え方が逆転してしまつたりしたので、とても強いインパクトがありました。

● まず!! 社会Ⅰを受講して本当に良かったと思います。他の授業では学べないことを沢山学ぶことができました。有田氏の考えなど、先生になる上で大変参考になることを沢山得られました。社会Ⅰの発表が一番気合が入り、発表の後のみんなとの意見交換も自分にとって大変得るものが大きかつたと感じています。色々話して下さる深草先生のトークも非常に面白く、知識が身につきました。

● 社会Ⅰの授業で、初めて人前に立つて発表することにより、度胸がつかました。発表するまでは、人前に立つことは恥ずかしいと思つていたのですが、みんなに調べたことを伝えたい、みんなの前でしゃべりたいと思えるようになりました。

(四) 卒業生・司会経験者

● 教育学科二回生において必修科目である「社会Ⅰ」の演習。二回生の時をふり返ると、事前に発表範囲の書物や資料を全員が予習の上で、発表を受け、先生の助言もいただきながら話し合われていく演習に、二重の学びがあると感じてきました。それは、自分で読むことを通しての学び、発表者や先生の読み方に触れ、新たな気づきや発表を通しての学び、というものでした。

そのような「社会Ⅰ」の演習に、四回生の時には、司会という機会をいただきました。事前の予習に加え、発表者が何を伝えようとしているのか、ということにしっかりと耳を傾け、より充実した学び合いの場が展開されるように努めてきました。後輩の様々な意見を受け、自分なりの考えをもう一度見つめ直しながら、毎回、私自身の気づきや思いも還元させていただきました。そうした中で、社会科をどのように教えるのかという視点を超えて、自分はどうのように考え、判断していくのか、また社会の一員として、自分はどのように生きるのか、ということを常に、自分に問う機会にもなっていました。そこから、どのように考え、判断していくのか、自分の基盤の薄さにも気づき、もつといろいろなことを知らなければならぬ、学んでいかなければならぬと何も知らない気づきが向上心にもつながっていったように思います。後輩からの様々な意見に学ばされ、まとめとしての深草先生からのお話や新たな問いにまた視野が広がりました。

深草先生に支えていただきながらの司会ではありましたが、司会をさせていただいたことで、より主体的に物事を考え、また相手が伝えようとしていることに、真に心を向けて聞くという姿勢を学ばせていただきました。また先生には自信のない気持ちは、クラス全体に伝わってしまうことや、学生が元氣のない雰囲気でも、その雰

困気に飲み込まれず、自分は生き生きと進めていくことの大切さなども教えていただきました。一年間の司会の経験は、問題意識の広がりとして、社会の一員として、教育者をめざす一人としての構えや、自ら向上し続けていくことの大切さへの実感となり、その気づきや学びが現在の生き方にまで影響を与え続けてくれています。二年次における「社会Ⅰ」の多くの学びから、さらに四回生において司会させていただいた経験は、卒業後も生きていく上での糧となっており、心から感謝しています。（安部香織「社会Ⅰ・司会の経験をふり返って」、平成十八年三月卒業、鳴門教育大学大学院を経て麗澤大学モラロジー専攻塾）

● 二〇〇七年度の「社会Ⅰ」において、深草正博先生のアシスタントのような形で一年間司会者を努めさせていただいた。本稿では、「社会Ⅰ」での司会者の経験から学んだことを中心に、現在大学院で活かしていることも触れながら紹介していく。しかしその前に、司会を務めることになった経緯について述べておきたい。

「社会Ⅰ」を受講した大学二年生のとき、当時大学四年生の安部香織さんが司会を務められていた。発表者やフロアーにいるものにとって安部さんの存在は大きく、発表後のコメントは勉強になる内容ばかりであった。深草先生と異なり安部さんのコメントは学生の視点から考えられていたため、学生にとって理解しやすかったと言える。また、回を重ねるごとに安部さんの姿が輝かしくなっていたのが印象的で、このことがきっかけとなり、安部さんのような大学生になりたいと真剣に考えるようになった。そして、大学四年生に上がってから念願の司会者を務めることになったのである。安部さんとの出会いや司会者を務めることを許可して下さった深草先生の恩恵があったからこそ、皇學館大学では非常に充実した学生生活を送ることができた。「社会Ⅰ」での二つの経験は、人生の転換点になったと言っても過言ではない。

それでは、司会の経験から学んだ三つのことを概観していきたい。

① 「社会科教育に関する基礎的な事項」の再確認

② 「追究していくこと」の楽しさ

③ 「柔軟な発想」の重要性

①は、毎時間のための予習が「社会科教育に関する基礎的な事項」の習得につながっていたということである。「社会I」を受講するにあたって、当然のことながら毎時間の予習復習は必須条件であった。しかし、予習するにしても知識がなければ理解しづらいという内容が多く、おそらく発表者も含めて配当された箇所を理解し講義に臨んでいた学生は皆無に等しかったと言える。そこで、以前の安部さんの姿を思い出し、司会者に与えられた責務というのは、私が理解している範囲内で発表内容の重要事項を伝えることであると考えた。そのため、毎週発表内容に関係する著書・論文を手に入れて読み込むことを課し、入念な事前準備をおこなうことを心がけるようにした。こういった取り組みの積み重ねは、微力ではあったが受講している学生に対して、有益な情報を与えることができたのではないかとという実感がある。そして、結果的に「社会科教育に関する基礎的な事項」を再確認するきっかけになっていたのである。

②は、発表内容に関する著書・論文に触れていくことによって「追究していくこと」の楽しさに気付いたということである。それまでの「追究」は他者から与えられた課題をこなすための「受け身」な追究であったが、今回は自らが構想を立てて行った「主体的」な追究であった。「主体的」な追究は、一つひとつの発見が大きな喜びへと変えていく不思議な力を持ち、「もっと知りたい」という貪欲な気持ちをも導き出す。これは、北尾倫彦氏が提唱する「自己教育力」と直結するものがある。

③は、全ての発表において柔軟な発想から生み出されたアイデアが提出され、そこから学ぶことが多大にあっ

たということである。「社会Ⅰ」は、必ず「独自性」のあるアイデアを提出しなければならないというプレッシャーに襲われながら、寝る間を惜しんで数週間の準備を行うところに特徴がある。また、配当された箇所をもう一つのグループと競う形で発表を行わなければならないという背景があり、「負けたくない」という気持ちがアイデアを生み出す源となっている。しかし、一年間を通しての感想として、大学二年生の時点では、社会科教育を論理的に考察していくという状態にはほど遠いものがあった。やはり多くの発表に共通する反省点として、配当された箇所以外の著書・論文からも考察する必要があるのではないかということが挙げられる。ただし、今日の社会科教育に「生徒の視点」から切実な願いを要請しているような発表が数多く見られたということを考慮するならば、「社会Ⅰ」は日常的に生徒が抱く社会科のイメージを再確認する機会となっている。それは、数週間行われた議論の中から見いだされた素晴らしい成果であると言ってもよいだろう。このような機会を提供されたことよって、受講していた多くの学生は「なぜ社会科嫌いになる子どもたちが多いのか」、「社会科としての教育的役割とは何か」等という、社会科教育の基本的な問題を共有できていたのではないかと印象がある。「生徒の視点」から導き出された柔軟な発想は、今日の社会科教育にも十分活かせる重要な概念として考えることができる。

①・②・③と概観してきたが、これらは大学院で研究を行っていく上での大きな財産となっている。①については、社会科教育に関する必要最小限の知識を習得できていたため、研究のスタートをうまく切れたということがある。②については、「追究していく」ことの貪欲さを学んだことで、多くの著書・論文を分析していくことに全く嫌な思いをすることなく、大変楽しみながら研究を行うことができているということがある。③については、研究を行っていく過程で論理的な考察を行っていくことは当然のことながら、それ以上に「柔軟な発想」を

意識しながら行えているということがある。ここでの「柔軟な発想」とは前述した「生徒の視点」とは異なるもので、社会科学教育の分野以外から社会科学教育を見つめなおしていくことを意味している。

毎日研究の難しさを実感しながら大学院生活を送っているが、現段階で自信を持って言えることは、司会者を務めた経験が全ての面で生かせているということである。新しい発見を行うために日夜追究することを忘れず、本当に楽しい研究生生活を送ることができているのは、あの一年間の経験があつたからである。研究に行き詰まつたときには、司会者のときに使用していたノートを見返して自らを奮い立たせることにしている。私のアイデンティティは、あの「社会Ⅰ」の一年間に集約されているのではないかと考えるほどである。大学生活の中で素晴らしい経験をしたという学生は他にも数多くいると思うが、大学の講義を一年間まかせられたという学生はなかなかいないのではないだろうか。それはもちろん深草先生の用意周到な準備のおかげでできていたことではあるが、一年間教育実習を行っていたようなあの感覚は、人間としても、教員として持つべき資質の向上としても、駆け出しの研究者になるための第一歩としても大きく成長できるものであつた。そのため、人生の転換点を求めている皇學館大学の学生がいるのならば、「社会Ⅰ」の司会者を一度でもいいので経験することをお勧めしたい。

(松村謙一「司会者の経験から何を学んだのか」、平成二十年三月卒業、上越教育大学大学院)

(五) 卒業生・現職教諭

● 平成二十年三月の新学習指導要領では改善基本方針として「社会科学、地理歴史科、公民科においては、その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、社会的現象に関心をもつて多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る。」と

書かれており、自分の生きる「社会」を知って、考える力を伸ばせるような内容へとなってきました。

深草先生の講義は私達学生に自らこのような体験ができる内容だったと思います。

社会Ⅰの講義で深草先生は、まず講義をはじめに「あたって『社会科は「暗記科目」ではない』ということと言われました。受験勉強で社会科は暗記するものだと思っていた当時の私にとっては驚きの言葉でした。

一つの事象に問題点を見出す鋭い目を養い、その問題点を徹底的に追究し、そしてある解決に至る道筋を明らかにする力を養うのが社会科だと学びました。

これは新学習指導要領にもある『自分の生きる「社会」を知って、考える力を伸ばす』という練習ができた講義だったように思います。

授業構成は、有田和正氏の比較的読みやすい本から始まりました。読み易い本をさらに六つの章に分けて短い箇所を三人一組で発表したのですが、発表にあたっての深草先生から与えられた課題は、三人で議論を重ねて「一つ以上問題提起をする」ということでした。

本は「読むもの」から「物事を考える一つの資料」となり、何度も推敲することで、問題点を見出すことができるようになりました。

講義の形式は 発表↓質疑応答↓討論・先生の補足という流れで行なわれていたのですが、この講義の流れも私には魅力的でした。

発表をする側の時は、何とか先生の追究心をもゆさぶられるような内容を探し、どのような質疑を受けても答えられるように、与えられた課題を熟読しました。また発表を聞いている際は何か討論できる部分はないだろうか、あらかじめ次回の発表の課題を熟読して講義に向かいました。

しかし、講義の最後の先生の補足では、あらゆることに精通している先生には私達の気づかない箇所を指摘され驚かされて、講義はいつもオーブンエンドで終わりました。

次に、深草先生の資料の提示の仕方でも多面的に事象を捉えられる構成になっていました。

有田本のあとは全く真逆の意見が書かれた論文が提示されて、私達はさらに揺さぶりをかけられさらに問題点をみつけられるようになりました。そして多角的に物事を捉えられる練習が出来るようになった後に、現代社会における「女性問題」「法則化」「原爆」などの学習課題を積み重ねて、その後深草先生の書かれた本を読み深めていきました。

この講義を生かして、授業を構成する時には、教員自身が教材を推敲した上で①固定観念をつきくずせる内容や資料の提示 ②現在の社会問題とリンクさせて子ども達自身が考えを深められる内容 を常に考えて授業設計をするようになりました。(永野朋子「社会Ⅰの講義を受けて」、平成十四年三月卒業、鳴門教育大学大学院を経て神奈川県現職教諭)

● 社会Ⅰの授業は、毎回三人一グループの学生が前に出て、本や論文等についての発表を行いました。発表者は、与えられたテーマについて「どうすればわかりやすく、インパクトをつけてフロアの学生に伝えることができるか」を時間をかけて研究・工夫し、教材を作成したり、機器を用いたり、関連する本や資料を読み、発表していました。これは、教える立場から教師としての専門性を深めたものと言えると考えます。また、フロアの学生は、聞く側、教えられる側(つまり、子ども)から「どのように伝えられるとわかりやすいのか、楽しくなるのか」を知ることができました。どのグループも、教材を工夫したり、フロアに発問したりして変化に富んだ発表ばかりでした。一年間の発表を見てみると、社会科は暗記させたり、教員が一方的に話したりして授業を行ってはい

けないことを実践しているように感じました。

また、「グローバル教育」「ジェンダー」「平和教育」等まんべんなく社会科の分野を知ることができたこともよかったと思っています。「専門性」と聞くと、どれか一つに分野を絞ることのように思います。他大学は、地理、歴史、公民等の分野毎に教授がいて、西洋史、東洋史、??時代等更に細かくなることがあります。細かく知ること大切ですが、広い分野の理論や知識を知ることが教師にとって、必要なことだと思っております。社会科として取り上げられる様々なことを聞いて、自分はどんなことに興味をもったのか、これから何を深めていこうとしたいのかのきっかけを考えさせられる授業だったと思います。更に、大学の授業で、自分の研究テーマのみを教えている授業があることも事実です。大学時代という、たくさんのことを吸収しやすい期間に、一つのことだけを教えるには、(吸収しやすいが故に)それに染まってしまいがちです。教員養成課程の大学は、将来の学者を育てるのではなく、教員を育てるためにあると思います。よって、有田氏や奥住氏、深草氏等をはじめ、様々な実践者の教育観、社会科のこれまでの流れや論争等を幅広く知ることができ、よかったと思っています。小学校の教員は特に、幅広い知識が求められます。この授業は、社会科の分野の枝をたくさん作って下さったと振り返ってみると、そのように考えています。

本の中には有田氏をはじめ、実践例が書かれていることもあり、社会科の授業として、どのような発問をして子どもを考えさせるのか、ねらいを達成するために授業がどのように構成されているのかを知ることができました。

社会科の教師になるために、教科書に書かれていることについて指導案を作成し、教壇に立つ練習を重ねることも必要かもしれません。教科書に書かれていることを題材にする方が、確かに即戦力になりやすいです。しかし、教科書の中身については、教師になればできること、嫌でもしなければいけないのです。それを、何事も吸

収ししやすい学生時代に行いすぎるのは、もったいない気がしてなりません。もし必要なのであれば、大学三年の後半でも十分な気がします。大学二年という時期に、社会科について様々な理論に触れ、自分の教育観の土台を耕し、どれを深めていくかを自分で決めて研究していくことが、長い目で見て、専門性につながると思います。

社会Ⅰの授業形態は、学生が前に立って発表し、その後先生が補足等を行っていました。これは、近年、現場で取り上げられている問題解決学習と似ています。問題解決学習を実際に体験し、理解を深めるように講義が構成されていたように思います。

私にとって、どのテーマも面白く、考えさせるテーマでした。この授業を受けていなければ、きつとずっと知らなかったかもしれません。そして、何も知らずに教師になっていたのかもしれない。もしそうだったなら・・・と考えると、ゾツとします。いろいろなことを知ることができて、よかったです。(服部裕美「社会Ⅰを受講して」、平成十五年三月卒業、鳴門教育大学大学院を経て神奈川県現職教諭)

● 学部時代の小学校専門社会にあたる「社会Ⅰ」(四単位)では、三冊の文献(有田和正『教材発掘の基礎技術』明治図書。奥住忠久・山根栄次編『二十一世紀「社会科」への招待』学術図書。深草正博『社会科教育の国際化課題』国書刊行会)を読み、その該当範囲の内容をもとにグループで発表しようというものである。

まず一年生で小学校専門生活にあたる「生活Ⅰ」(四単位)があるのだが、その授業の中で大学生はどうあるべきか、いかに学ぶべきかを学ぶ。その中で深草先生の授業では特に週に一冊は本を読むことを勧められる。ただ勧められるだけではなく、授業の内容とかかわって数十冊の本を紹介される。大学一年次に本を読むことの大切さを徹底的に講義されるのである。

その過程を経て、二年次「社会Ⅰ」では三冊の文献を丁寧に読み込んでいくことを求められるわけである。発

表者だけでなく受講者全員が文献を読んで授業に向かう「予習」が求められることとなる。

内容について各々考えはあるところだろうが、受け身ではなく主体的に学習に向かおうという姿勢が、社会Ⅰには求められるのである。社会科という教科にとどまらず、この主体的に学習するという方法を学ぶこと自体が教員としての資質を高めることとなると考えられる。

さて、「社会Ⅰ」の授業を通して大きく学んだことが三つある。それはまず第一に、「社会科Ⅱ暗記科目」からの脱却であり、このことを真正面から突きつけられたことである。自分が学生や中学生の時代、社会科の学習と言えば、まさにテストの前にワークを何度も行ったり、授業中にメモした用語を暗記したりといったものが中心であった。社会Ⅰを受講し、まさに目から鱗の事実を突きつけられたのである。楽しく社会科を学習することについて、ネタをぶつけたり、問題解決学習を取り入れたりといろいろと方法はあるのだが、そのいろいろと方法があることを主体的に学ぶことで知っていくのである。また社会科が単に暗記科目ではなく、人格形成に大きく繋がっているということも知るのである。このことは社会科の究極目標である「社会認識を通して公民的資質を育成する」ということにつながっていく。

第二として、これまでの社会科教育史の中で論争となった事象を様々な論文を用いて扱うことは大きい。様々な論争の中で私が一番印象深いものは「切実性論争（有田・長岡論争）」である。この論争がどうして印象深いものとなったかを探ってみると、まず論争に対し、様々な立場からの論文を読み判断することを求められるのである。テキストや有田和正氏、長岡文雄氏の論文以外にも谷川彰英や山根栄次氏などの論文が授業で用いられ、様々な資料を読んだ後、発表者としての見解を求められることとなるのである。発表者がその論争に対しどのような立場をとるか様々であるとしても、その立場を選択する過程でいろいろと考えをめぐらせることこそが大学

での学びとなり、それがまた現場での学びのスタイルを形成していく際の糧となると考える。指導案を作るにも、そのアプローチの仕方は様々である。大学時代に様々な論争について考えられることは、社会科教育学の理論研究と実践研究を結びつけるために有用となると考えられるのである。

最後に第三として、まさに教育実習に臨む前の二年次に発表があるということである。それぞれの発表者は受講者に分かりやすく示すために様々な工夫をする。模造紙を使い図式化したり、プリントに整理をしてまとめたるるわけであるが、その作業過程はまさに授業に臨む教師の姿そのものである。分かりやすく話そうとすればするほど、発表者の準備が必要であり、文献も丁寧に読み込むわけである。

深く社会科教育学を学ぶ前に、この「社会Ⅰ」の授業はとても実りの多いものであったとふり返る。(石田智洋「社会Ⅰで感じたことをもとに」、平成十五年三月卒業、三重大学大学院をへて三重県現職教諭)

● 社会Ⅰでは、発表後学生と先生から質問と意見、時には反論が出されます。専門的な内容の上に、このプレッシャーのため、発表者は何週間も前から仲間と相当研究しなければなりません。参考文献に当たったり、何度も集まって合議をするのですが、この経験は卒論作成や現場での教材研究に通ずるものです。この演習を通して、学生として、教師の卵としての資質が育成されていると思います。(萩原浩司「社会Ⅰを受講して」、平成十六年卒業、三重大学大学院を経て三重県現職教諭)

七、資 料

ここに資料として掲げるものは、発表する際の際の原稿として学生たちがあらかじめ作成してくるものの実例で（平成十一年度）、たった一例ではあるが大学二年段階としては大変優れたものとして保管しておいたものである。発表内容は前記二十二で、大塚久雄の生涯および研究の全貌に亘るものである。もちろんこの発表のベースには、松本氏の論文「戦後史学と『大塚久雄』」があることはすでに記した。が、その他に様々なものを使っている。

今から、西井えり、西口めぐみ、西村匡代、一九九九年度の発表を始めます。皆さんは、大塚久雄という人物を知っていますか。山川出版の日本史の教科書にも名前が出てきます。でも今回のプリントを読んで、初めて知ったという人がほとんどなのではないでしょうか。これから私たちが、大塚久雄という人物と、彼が歴史学にあたえた影響を中心にして発表していきたいと思っています。

一、人物像

では、まず大塚久雄氏の人物像に迫ってみたいと思います。大塚氏は一九〇七年、京都で父母ともにクリスチャンの家庭に産まれます。そして小学校を京都府師範学校附属小学校で過ごします。大塚氏はこの小学校の中の第二教室に編入されます。第二教室というのは、成績優秀者を選抜したクラスで、小学校五年生の課程で中学校一年生程度の英語や漢文も教えるという、今で言う、いわゆる英才教育が行われていました。大塚氏はそのころからクラスで何事

にもズバ抜けていたようです。外見からは小柄で、色白で、おとなしそうに見えましたが、実際は大変勝ち気な少年でした。どの学科の成績もいつもトップで、たまに二番に下がるようなことがあれば本当に歯を食いしばるほど残念がっていました。何事にも元氣いっぱい取り組む大塚氏はクラスメートの親愛と尊敬を集めていました。

続いて、京都府立第一中学校に入学するわけですが、この学校は京都の名門校で、一二〇人の募集に対して、七〇人ぐらいの志願者がありました。大塚氏はその中からトップで入学します。中学時代は柔道一筋で、身体もガッチリしていました。そして、二十歳の春、東大経済学部に入学します。この大学時代に大塚氏は初めてマックス・ヴェーバーを知ることになります。この時の大塚を知る人は「学問に対する貪欲なばかりの情熱にただ驚嘆した」と言っています。そして、法政大学講師、助教授を経て、一九三八年、当時三十一歳で法政大学の教授であった大塚氏は、翌年、東京大学経済学部の講師に降格しています。

この時期に起こったのが「平賀肅正」です。平賀肅正というのは東京帝国大学の平賀讓総長が、経済学部の内紛を肅正した事件のことです。一九三八年十月に文部省が著書発禁問題を理由として、経済学部河合栄治郎教授の処分を求めます。それが同学部内の派閥抗争とからんで問題が拡大し、翌年一月、平賀総長が両派のリーダー、河合栄治郎・土方成美両教授の休職処分を一方的に決定したため、経済学部教官の多くは辞意を表明し、大学自治の内部が崩壊してしまいます。それに伴う経済学部の「再建」人事によって、法政大学から招かれたのが当時三十三歳の大塚久雄氏でした。

その後、第二次世界大戦が始まります。戦時中は与瀬に疎開しながらも自ら研究を続けていました。戦争のために、食糧の不足に反して、空襲は増加します。そうになると、誰しもいらだってくるでしょう。そんな時、大塚氏は友人が「ムシヤクシヤしたら、モリモリ勉強しろ」と言っていたことを思い出して、マックス・ヴェーバーを読み深めてい

きました。しかし、眼底を悪くしてしまい、一年間読書禁止を食らってしまいます。これからみても、如何に大塚氏が学問に情熱を燃やして取り組んでいたかがよくわかると思います。

日本では学者が身分として固定されてしまっているため、教授だからと権威をカサにして重さがあるように言っているのを、大塚氏は嫌っていました。そういう謙虚さからか、大塚氏の話の特徴は、決して一段高いところから人に教えようとはせずに、どんな人とも常に同じ平面に立って話そうとするところにあります。大塚氏は「あらゆる秘術をつくして面白く話す」ために話術を練習していたようです。こうした努力によって、色々な人に慕われるような人になっていきました。

二、大塚史学の形成

それでは大塚史学の形成について話していきたいと思えます。大塚氏を中心として形成された経済史学は、太平洋戦争の直後の日本社会において、アカデミズムの世界のみならず、きわめて広範囲に影響を及ぼし、戦後日本の社会科学における重要な傾向の一つを代表するものでした。経済史学の大家久雄氏、政治学の丸山眞男氏、法社会学の川島武宜氏、人文地理学の飯塚浩二氏らのグループが、戦後すぐの時期から高度成長期に至るまでの時期に、日本社会の再建に向けて思想上大きな役割を果たしました。彼らは戦前の社会体制を厳しく批判し、あるべき日本社会の姿を西洋経済史、日本政治思想史、法社会学、人文地理学などの各専門領域において明快に主張しました。

経済史学においては、大塚氏のほかに後に「大塚史学のトリオ」といわれる高橋幸八郎氏、松田智雄氏らが核となり、その周囲に形成された学派は「大塚史学」あるいは「比較経済史学」と呼ばれ、その成果は『西洋経済史講座』（全五巻、岩波書店、一九六〇～一九六二年）として結実することとなりました。

この学派は、戦前の「日本資本主義論争」の中で労農派に対抗した講座派の影響を強く受けていました。この「日本資本主義論争」が、大塚氏を資本主義が最も典型的に発展したイギリスへと目を向けさせる、大きな誘因となりました。日本資本主義の段階と類型を明確にするためには、そのまゝに、イギリス資本主義の段階と類型を説明しておかなければならない、と大塚氏は考えました。こうして大塚氏は独自の個性のもとでマックス・ヴェーバーの思想を吸収することによって、日本の社会科学の中できわめてユニークな理論構成を作り上げるようになりました。

それでは、「大塚史学」の形成と展開を十五年ずつ大きく三つの時代に分けて説明していきたいと思えます。

第一期は、一九三〇年から一九四五年の終戦までの十五年間です。当時の日本は、一九三七年文部省が出版した『国体の本義』に典型的に見られるような、建国以来の日本の国体が他の国よりも良いとする国粹主義でした。そのころ世間では、「国体明徴」「国民精神総動員」が唱えられていただけでなく、大学の中でも思想・言論のとりしまりが強化され、共産主義をはじめ、自由民主主義的な思想・学問への弾圧事件も次々に起こりました。とりわけ、帝大経済学部では、矢内原忠雄、大内兵衛、河合栄治郎といった教授たちが次々にその標的となり、辞職を強いられたり、検挙されたりしました。このような「暗い谷間」の時期、大塚氏は、「日本資本主義論争」の講座派の影響を強く受け、ヨーロッパ、主にイギリス近代経済史の研究を志し、理論的、実証的な研究をおこなうなかで、資本主義の分析について根本的な問いかけをおこないました。そして、それは「比較経済史」として具体化していきました。

第二期は、一九四五年から一九六〇年までの十五年間です。この時期戦前の日本の資本主義は、先進的なヨーロッパやアメリカに比べて、その発展、成長が歪められた形をとっていました。そのゆがみを直して、新しい民主的な国家国民経済を再び編成しなければならないということになりました。言いかえれば、「近代化」、「民主化」という大きな課題に直面していた「後進国」日本にとって、「先進国」ヨーロッパの「近代化」つまり「封建制から資本主義

への移行過程」の研究は、そのまま現実の社会変革に直接関わる問題として切実に受け止められました。このような戦後改革の時期に「大塚史学」の登場は、歴史学だけでなく、日本の社会科学、人文科学にとつて、いわば一つの「科学革命」をもたらしました。学派としての「大塚史学」は、大塚久雄氏のイギリス経済史研究、高橋幸八郎氏のフランス経済史研究、松田智雄氏のドイツ経済史研究を中心に理論的、実証的研究が積み重ねられ、深められ、ヨーロッパ近代経済史として総合されることによって、ヨーロッパ近代史研究の質を飛躍的に高めました。そして、その成果の一応の体系化が、すでに触れた『西洋経済史講座』全五巻の発刊となりました。

第三期は、一九六〇年から一九七五年までの十五年間です。この時期は「大塚史学」の成熟期といえます。日本は一九六〇年の安保闘争を経て、高度成長の時代へと移っていきました。封建制から資本主義の移行ではなく、その次の産業革命の時代が実践的研究課題として意識されました。一方、国際的には「南北問題」が新しく世界史大での経済の再検討をせまる問題として意識されました。これらの新しい問題についての研究の展開にとつても、大塚氏の言は大きな意味をもちました。しかしこの時期は、戦後初期のように「大塚史学」だけが圧倒的な時代ではなくなっていましたし、「大塚史学」の中からも新しい模索が生まれつつありました。

以上のように、「大塚史学」は、戦前の「暗い谷間」に胚胎し、終戦後、戦後改革の時代に脚光を浴び、圧倒的な影響を持ちました。大塚氏の研究成果は、敗戦による半封建的な日本資本主義の崩壊と民主化の推進という時代の動きにもマッチして、経済史研究のみでなく、社会科学研究全般に、また日本の思想界へも大きな影響を与えました。その後、高度経済成長を経て、日本は「後進国」から「先進国」となり、それにつれて現実の課題も大きく変わっていききました。

三、諸業績

大塚氏の業績の根本は、資本主義の最先進国であるイギリスの歴史的事実をもとに、封建制から資本主義が成立してくる歴史的道筋を実証的、理論的に確証した点にあります。

従来、近代資本主義の成立については、歴史とともに古い商人資本や高利貸資本がそのまま発展して産業資本家になった、とする説が主流でした。しかし、大塚氏はそうした通説に異を唱えました。大塚氏によれば、イギリスにおける資本主義の成立の基盤となったのは、商人が本拠とする都市ではなく、封建農村でした。イギリスの農村では、領主に対する農民の負担は、大陸に比べるとわずかであり、そこから農民解放によって自由になった自営農民といった中産的生産者層が生まれてきました。毛織物生産とその他の手工業を営む彼らを中心に、農村共同体の中に商品交換が普及し、その結果として中産的生産者層の内部に貧富の差が発生します。

このように、封建的な農奴をでどころとする中産的生産者層たちが両極に分解して、産業資本家と賃金労働者が形成された、というのが大塚氏による資本主義成立に関する説明です。

もう少し具体的に説明しましょう。まず、封建農村というのは、領主と農奴という関係があつて、領主が持っている土地で農奴が働くことによつて得られた収穫はすべて領主のものになっていました。これが農奴解放によつて、農奴は封建的拘束から自由になります。そしてここから、従来の考え方と大塚氏の考え方との違いになります。

まず、従来の考え方というのは、商人とか農民がいて、お互いの商品やお金のやりとりがおこなわれるなかで、商人が次第に経済力をつけて発展し、そこから産業資本と賃労働者の関係が生まれ、近代資本主義の成立をもたらした、という考え方です。それに対し、大塚氏はそうではなくて、農民の間で商品交換が普及し、そこから貧富の差が発生

し、それが発展し、両極に分かれたものが、産業資本と賃労働者の関係になっていった、という考え方です。これが大塚氏の業績の根本になっていくのです。皆さんにも少しは理解していただけたと思います。

大塚氏のこれまでの膨大な業績の背後に一貫してつらぬかれているものは、歴史個体としての「近代ヨーロッパ」の特性を典型的に創出しようとする姿勢でありますが、実は、これは非ヨーロッパ世界、つまり、私たちの住む「アジア」の歴史的個性を明らかにしたい、という大塚氏の関心に直接つながっているのです。

四、人間類型

ではここで、大塚氏を勉強していくうえでもう一つ重要なポイントとなってくる「人間類型」についてお話ししたいと思います。

大塚氏を勉強していくにしたがって、「人間類型」という言葉をよく目にするようになります。そもそも「人間類型」とは何なのか、大塚氏を理解していくためにも重要な語となります。そこで、大塚氏が「人間類型」という言葉をどのようにとらえ、どのような意味をもたせて使っているのか、そのあたりを簡単におおよその見当をつけてみたいと思います。

私たちの普段の生活に近い事例を取り上げてみましょう。皆さん、自分の部屋を思い浮かべてみてください。きれいな人、ぐちゃぐちゃな人、いろいろな人がいると思います。たとえば部屋をどんどん汚くしていくAさん、いつもきれいにしているBさん。二人がお互いに部屋を変えてみるとうなるでしょうか。想像がつくと思いますが、今まできれいだった部屋はどんどん汚くなっていくし、今まで汚かった部屋は、いつの間にか整頓されてきれいになります。また他の例では、その人がいると周りも明るく、賑やかになるような人もいるし、反対に、その人がいる

と、なにか、お通夜のように暗い雰囲気になってしまふ人もいます。このように人間には、いろいろなタイプ、型、または類型といったようなものがあります。これらは個人についての事例でした。

では集団においてはどうかでしょうか。例えば、大きくある時代のある国民の思考や行動の様式をとり、それを別の時代、または別の国民の思考や行動の様式に比べてみると、何かタイプ、型の違いが見られる、ということが確かにあるとは思いませんか。つまり、そういう集団としての人間にも類型が見られるわけです。もっと細かい集団でみた時では、例えば皆さんが東京のような都会と田舎を往復しているだけでも、それははっきりと感じとれるのではないのでしょうか。このように、ある時代のある国民が全体として特徴的に示す思考と行動の様式、そのタイプを「人間類型」と考えて下さい。これはあくまで、おおまかにとらえた場合です。さわりだけになってしまいました。この「人間類型」という言葉を少しでも理解しておく、大塚氏の理論も、理解しやすくなるのではないかと思います。

おわりに

大塚氏一人を取り上げても、追究していくにしたがって、経済学だけでなく、政治学、歴史学、宗教、思想など様々な分野におれていくことになります。しかもそれらは、バラバラに存在しているのではなく、必ずどこかつながっているのです。「個々の学問の地下茎は思わぬ所につながりあっているものだ」という文章で福井謙一氏はそのことを表しています（『学問の創造』佼成出版、一九八四年）。そのように、追究していけば行くほど、いろいろなつながりが見えてきて視野もさらに広がるのです。皆さんも、大塚久雄氏のような偉大な人物を追究してみてもいいでしょうか。

おわりに

今一番頭を悩ましているのは、来年度のことである。名称は「社会Ⅰ」から「児童社会」に変わるが、何と云っても大きな変化はこれまで一年かかってやってきたものを、半年で済まさなければならなくなったということである。当然同じ結果は期待できない。これまで十八年間かかって積み上げてきたものを基にして、半年で最大の効果を上げるにはどうすべきか。また試行錯誤と思索の新たな旅が始まる。

註

- (1) この発表は平成二十年十月十二日、滋賀大学において開催された第五十八回日本社会科教育学会全国研究大会でなされた。その『全国大会発表論文集第四号』に、本稿のダイジェストが載せられている(三一六―三一七頁)。
なお、この課題研究のコーディネーターは、西村公孝(鳴門教育大学)・戸田善治(千葉大学)・栗原久(信州大学)の三氏であった。
- (2) 有田和正氏の書物は、当初は『教材発掘の基礎技術』(明治図書、一九八七年)を十年間使用(途中一年間のみ『追究の鬼』を育てる)同、一九八九年を使用)していたが、絶版のため次いで『ネタ』開発ノウハウ(同、一九八八年)、『ネタ開発のノウハウを身につけよ』(同、二〇〇三年)を経て、現在のものに至っている。
氏の「ネタ論」には異論もあるが(それについては拙稿「強育」と「共育」のはざままで―『学力低下論争』を類型学的にみる)『皇學館大学教育学会年報』第二五号、二〇〇四年、二―五頁を参照されたい)、初心者には取つきやすく(決して内容が簡単という意味ではない)、大学生二年生には大変評判がよい。
- (3) 当初平成三年から絶版になるまでの三年間、先の有田氏の『教材発掘の基礎技術』とともに本書を使用した。